



第百三十五號

(第十二卷)

昭和七年七月

星の詩 月の歌

斐田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は傍ぎ出でな

にぎたつ ふなの
波津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清く明りこそ
わたつ み
月讀の光に來ませあしびきの山を隔りて遠からなくに
つくよみ

春されば木がくれ多き夕月夜おぼつかなくも山陰にして
ゆふづくよ へな
ぬばたまの夜渡る月をおもしろみ吾が居る袖に露ぞ置きにける

水底の玉さへ清に見つべくも照る月夜かも夜の深けゆけば

雨晴れて清く照りたるこの月夜また更にして雲な棚引き

さ夜中と夜は深けぬらし鴈が音の聞ゆる空に月渡る見ゆ

秋風の清きゆふべに天漢舟傍ぎ渡る月人壯子
あまのがは こ つきひとをさこ

(萬葉集)

五月雨は心あらなむ雲間より出で来る月をまてば苦しも

天の川みなわさかまきゆく水の早くも秋の立ちにけるかな

秋風に夜のふけ行けばひさかたの天の河原に月かたぶきぬ

天の原ふりさけ見れば月清み秋の夜いたくふけにけるかな

紅のちしほのまふり山の端に日の入るときの空にぞありける (金槐和歌集)

たらちねの母がなりたる母星の子を思ふ光我を照せり

寝しづまる里のともしび皆消えて天の川しろし竹藪の上に (正岡子規)

迢迢牽中星 皎皎河漢女 纖纖擢素手 札札弄機杼 終日不成章

泣涕零如雨 河漢清且淺 相去復幾許 盈盈一水間 脈脈不得語
オサデ シ ノ グ シ ル ゾ ノ カサシ ノ マ
(西漢、古詩)

夜宿山寺

唐李白

層樓高百尺 手可摘星辰 不敢高聲語 恐驚天上人
サ ヅカラ ツマム ラ テ ニ ラ クハ カサシ ノ マ

京都 池田政晴集む